

心豊かに 法住寺の地蔵盆

子どもの守り神ともいわれるお地蔵さん。子どもたちの夏休み終盤のお楽しみは「地蔵盆」です。今回は千里ニュータウンからちょっとだけ足をのばし、千里山にある法住寺(ほうじゅうじ)のちょっとめずらしい地蔵盆をご紹介します。

本堂で阿弥陀仏像に見守られながら「数珠くり」。子どもと大人で長い数珠を何度も回す。寺提供写真



法住寺は千里山東2丁目、千里山グレース幼稚園の西隣にある浄土宗のお寺。始まりは大阪の西寺町(現在の北区兎我野(とがの)町)で、秀吉に代わって家康が大阪城に入った慶長4年(1599年)のこと。近松門左衛門の『曾根崎心中』にも登場している。

第二次世界大戦の空襲で、ご本尊の阿弥陀仏像の他は燃えてしまったが、そのあと復興を遂げ、昭和46年に千里山に移って来た。なお「大阪新四十八願所阿弥陀巡礼」の札所第1番でもある。ちなみに第48番はあの法善寺だ。

寺門をくぐって石段を上ると、正面に立派な地蔵堂が建つ。ここに安置されるのが、地域の人に「ひぎりさん」と親しまれる「日限(ひぎり)地蔵尊」。日を限って祈願すると、願いが叶えられるという。

もとは、お寺を開いた人が、夢にしたがって難波の砂の中から発見したという地蔵だった。しかし戦火に焼かれて、現在のものは昭和24年の再建。住職の飯田海旭(かいぎょく)さんは「法住寺は地蔵さんからできた、と言われるほど地域の人々の地蔵信仰が厚くて、戦後は本堂より先に地蔵

堂と地蔵が再建されたんですよ」と話す。



「ひぎりさん」と親しまれる等身大の地蔵、日限地蔵尊(菩薩)

ところで、なぜ地蔵は子どもの守り神になったのか。色々な説があるが、伊藤古鑑著『お地蔵さま』(1972年・春秋社刊)には、親しまれやすい赤い頭巾やよだれかけの姿で(子どもと同じ目線で)道ばたの辻に祀られているので、無邪気な子どもたちが

面白がり、知らず知らずのうちに手を合わせるようになった。そんな子どもたちに奇跡が起こると「地蔵さんのおかげ」となり、子どもとの関連が強まっていった、というようなことが書かれている。

しかし法住寺の像は、私たちが普段イメージする石造りの小柄なものと違い、木造の極彩色(当時)等身大。ふくよかで表情は穏やかだが、半開きの目はこちらの心を見透かすようで、生半可な気持ちで願をかけるのは失礼な気がした。

法住寺の地蔵盆は本堂で行われる。住宅地の中にあるとは思えない、木とお香のかおりが漂う静かな空間に、子どもたちがちょこんと座って住職のお話やお経を聴く。その後、長い数珠(じゅず)を子どもと大人でぐるぐると回す「数珠くり」が行われる。思わず「ワー、ワー」と子どもらしい声も上がる。

専門家による昔懐かしい紙芝居の後、お待ちかねのお菓子や飲み物が振舞われて地蔵盆は終わる。住職は「近年はママ友同士で誘い合ったりして、有難いことに参加人数が増えています。子どもだけでなく、親が楽しむ姿もほほえましい」。お菓子が足りなくなれば、近所のスーパーに買いに走ることもあるという。

その上で「核家族化した現在は、故郷のない子どもたちが多く、普段仏壇に手を合わせることもなく、人の死とも縁遠い生活をしています。不可解な事件が多い世の中、地蔵盆を通じて、なにか心が豊かになるものを持って帰ってほしい」と願っている。

今年の法住寺の地蔵盆は、8月24日(土)午後7時より午後8時40分頃までの予定。「お友だち同士や家族みんなで来てください」と地域に呼びかけている。(岡野)



住職の飯田海旭さん 7月10日